

## パラフィルムを利用した袋掛けによる 「不知火」の果皮障害軽減法

農業研究センター 天草農業研究所  
担当者：三原 崇史、奥田 良幸

### 研究のねらい

従来、「不知火」の露地栽培では1月中・下旬に採収を行うが、2月あるいは3月まで樹上に成らせておく完熟栽培の方が品質が良好となる。しかし、完熟栽培を行うと水腐れ等の果皮障害の発生が増加し、青果率向上の妨げとなっている。

そこで、パラフィルムを利用した袋掛けにより「不知火」の完熟栽培における果皮障害軽減技術を確立する。

### 研究の成果

1. 袋掛けを行うことで水腐れ、褐変症の果皮障害の軽減が図れ、さらに袋の口（果梗部）にパラフィルムを巻くパラフィルム処理を行うと軽減効果が高い（図1）。
2. 袋掛け果実の糖度は、無袋で着果させた果実と同程度であり、袋掛けによる品質低下はない（図2）。
3. 1人当たり1日の袋掛け数はパラフィルム処理を行うことで、作業時間が増えることから、袋掛けのみに比べ5割程度である。（図3）。
4. 10a当たりの収益は、パラフィルム処理を行うことで、青果率が向上し、2割程度の増加が見込める（図4）。

袋掛けにパラフィルム処理を行うことで、作業時間は増えるが、水腐れ等の果皮障害が軽減できることから、青果量の増加が期待できる。

### 普及上の留意点

1. 袋掛けは果実が十分に乾いてから行う。
2. パラフィルムは袋の口（果梗部）から水が入り込まないように巻く。
3. 袋掛けは労力を要するため、県内の「不知火」栽培地域において、2月あるいは3月まで完熟栽培を行う地域において有効である。
4. 3月まで樹上に成らせる完熟栽培は樹体への影響が大きいため、残す果実は全果実の3割程度が望ましい。

[ 具体的データ ]

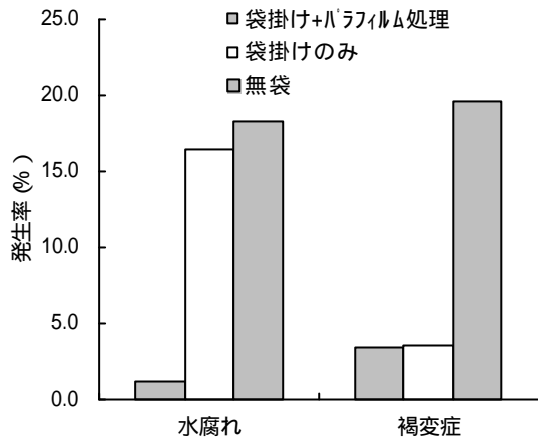


図1 果皮障害発生率

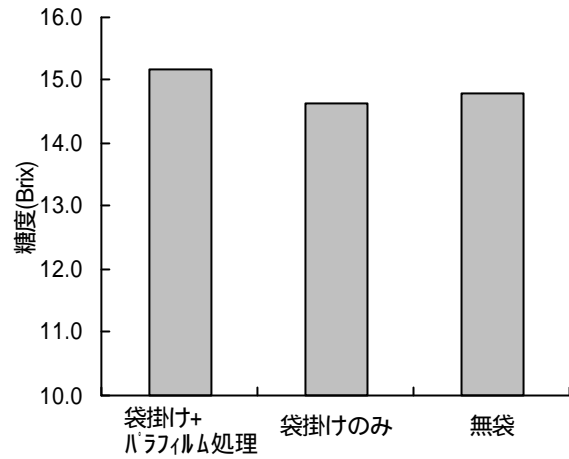


図2 果実品質 (糖度)

注) 1 袋は二重袋を使用し、袋掛けおよびパラフィルム処理時期は12月上旬、水腐れ 褐変症発生率は2月中旬調査  
 2 果実品質は2月中旬調査

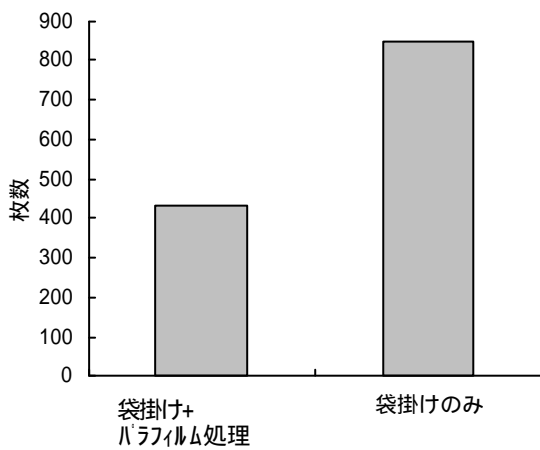


図3 1人あたり1日の袋掛け数

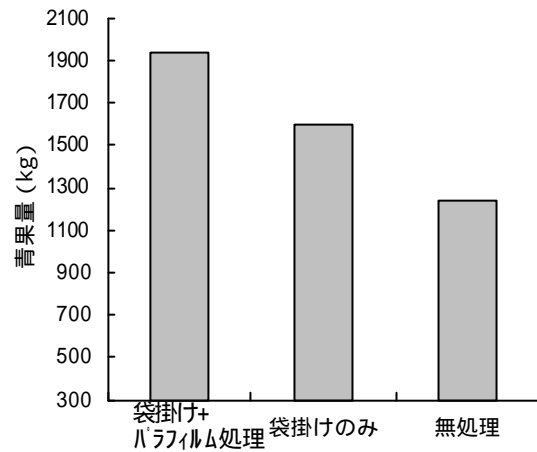


図4 10a当たりの青果量

注) 1 袋掛け数は農家1人当たり1日平均850枚として算出  
 2 収益は生産量を2t/10aと想定し、単純青果率から算出



写真1 パラフィルム処理の様子